



西洋史学専修（研究室紹介）

山本， 航

(Citation)

神戸大学史学年報, 39:8*-10*

(Issue Date)

2024-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491661>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491661>



西洋史学専修

山本 航

私の所属している西洋史学専修では、古代から現代までそれぞれの年代を専門とする先生方のもとについて西洋の歴史を学ぶことができます。今回の研究室紹介では、西洋史学専修全体に関係する事柄と指導教員の古代ギリシア史をご専門とされている佐藤昇先生のゼミについて取りあげます。

西洋史学専修では、時代の別を問わず学生が学部と大学院に分かれて行われる演習で、前期と後期にそれぞれ一人一回ずつ研究の報告をする機会が設けられています。そこでは、報告内容に対して他の学生や先生方から質問や提案を受けるため、今後の研究を見直すきっかけとなります。私の場合でも、自分では気がつかなかった視点や疑問を知ることができたことがあるため、研究を進めるために必要な機会だと思っています。

学部の演習と大学院の演習と分かれています。西洋

史学専修全体で学部生と大学院生同士の交流は活発に行われています。例えば学部生全体ゼミにTAとして大学院生が参加していますし、大学院生が主催して学部生と大学院生の希望者が参加する読書会も行われています。この読書会では、過去に先生方の卒業論文を題材としたことがあったそうです。そのほか、年度はじめに新歓が、おわりに送り出しの行事が専修全体で行われます。コロナが流行し始めた二〇二〇年からしばらくはこのような行事は中止となっていました。二〇二二年度末の送り出しから復活を果たし、昨年度は新歓と送り出しを行うことができました。社会が徐々にコロナ前の姿へ戻っていくにつれて大学もかつてに戻りつつあります。こうした学年を越えたつながりができることも西洋史学専修の特徴の一つです。

西洋史学専修の読書室には、あらゆる時代の分野に関

する本や雑誌が所蔵されており定期的に新しい本を入れて更新が行われています。この部屋は学生同士が交流する場でもあります。学生同士がゼミや研究について話すことや、全く学問とは関係のない私的な話をして親睦を深めることが行われています。

佐藤先生のゼミについては、大きく外書講読と個別の面談の二つを紹介します。

外書講読の授業（前述のものとは別の演習）では基本的に英語で書かれた文章を読みます。例えば古代ギリシアの農業に関する論文や、佐藤先生が長期出張で不在の際には外部講師の先生が軍事制度や宗教に関する書籍の講読が直近の三年間に行われました。他の講読ではドイツ語やフランス語で行われるものもあります。この授業は、西洋史を研究する上で必要不可欠なものだと言えると思います。というのもこうした外書講読で卒業研究に必要な外国語文献を読み理解する力を養うことができるからです。また通常の講義では扱いきれない古代ギリシア世界に関する知見を深めることもできます。この点は講読授業のオイシイ部分です。私の場合古代史ですが、同じ古代史の中でも地域的に卒業研究で触れることのないところに関して知ることができたのは、こうした講読授業の機会があったからです。

具体的にテキストを一つ取り上げると、古代ギリシアの軍事制度に関するテキストでは、アテナイにおける「見習い兵制度」の成立が前三三八年のマケドニア対ギリシア連合軍のカイロネアアの戦いに先立つものかどうかについて議論が行われていました。このタイプの授業では大抵の場合、事前に該当する箇所を誰かに割り当て、内容の要約や用語についてまとめる課題を課して説明する機会が設けられています。私自身二、三年次は積極的にこうした外書講読を受講し卒業研究に向けた外国語文献を読む力を鍛えることができ、卒業論文提出までに相当数の外国語文献に目を通すことができるほどになりました。

佐藤先生のゼミでは、外書講読のような多人数を相手にするものだけでなく学生一人一人との個別の面談も行われています。この個別面談は全体ゼミでの報告後や長期休み前後、適宜必要に応じて一年に数回行われます。主な面談内容としては研究の進捗状況に関するものがあり、体調や気がかりなことなど研究とは直接関わりのないことについても含まれます。研究に関する面談で具体的に、報告後の面談であれば報告内容からわかる研究の現状確認と今後について提案や文献紹介が主となり、論文提出が近づいてくると論文のはじめからおわりまで

全体を意識した話し合いが多くなります。

文献紹介では、始めは分野の概説書や特定の事象に少し専門的な文献からで、研究の入り口となるような文献（例えば Blackwell の Companions to the Ancient World シリーズ）を紹介していただけます。研究が進んでくる頃には、より分野に特化した文献紹介をさせていただけるため、研究をさらに深めることができます。この面談で、報告後や休み前後研究状況についてきちんと整理することができたため、卒業研究をそれほど横道に逸れることなくスムーズに執筆、提出することができました。面談前の構想とは異なる卒論構想を提案され、少し急いでそれに合わせた修正をすることがありましたが、基本的にはそれまでの研究の蓄積を活用しながら軌道修正する案でしたのでそれほど時間を掛けずにより良い論文を仕上げることができました。これも現状を踏まえた先生の的確な指導のおかげだと思います。

西洋史学専修のどのゼミにおいても言えることだと思いますが、基本的に各自の関心に基づいて研究を進めていく中で、少人数のきめ細やかな指導を受けて学ぶ者として自立していける場所だと思います。このゼミを通して、自分でやることを見つけてそれを説明するために動くという、将来どこかで役に立つ力を身につけることが

できました。

今回は史学年報初の専修紹介の試みということですが、最初に投稿する機会をいただけたことを嬉しく思うとともに、感謝したいと思います。日本史と東洋史の研究室紹介も同時に投稿されていると思いますので、それらと比較してみるとおもしろいかもかもしれませんね。